

## 赤松智城の宗教学散策（2）

——未刊原稿と写真資料から見るその多彩な宗教的関心——

全 京秀

この報告は、山口大学図書館に赤松文庫としてその蔵書が所蔵されている宗教学者・赤松智城（1886-1960）について、2017年3月に刊行された本誌14号に掲載された拙稿（全2017）の続編である。合わせてお読みいただければ幸いである。



シャーマンが腰に巻く鈴をもつ赤松智城（奉天の清寧宮にて）

後に仏教僧となる赤松は、宗教学者として仏教以外の色々な宗教に対して勉強する機会を持った。彼は、自身が習得した諸宗教に関する知識を整理することによって講義と出版に臨んだと言える。



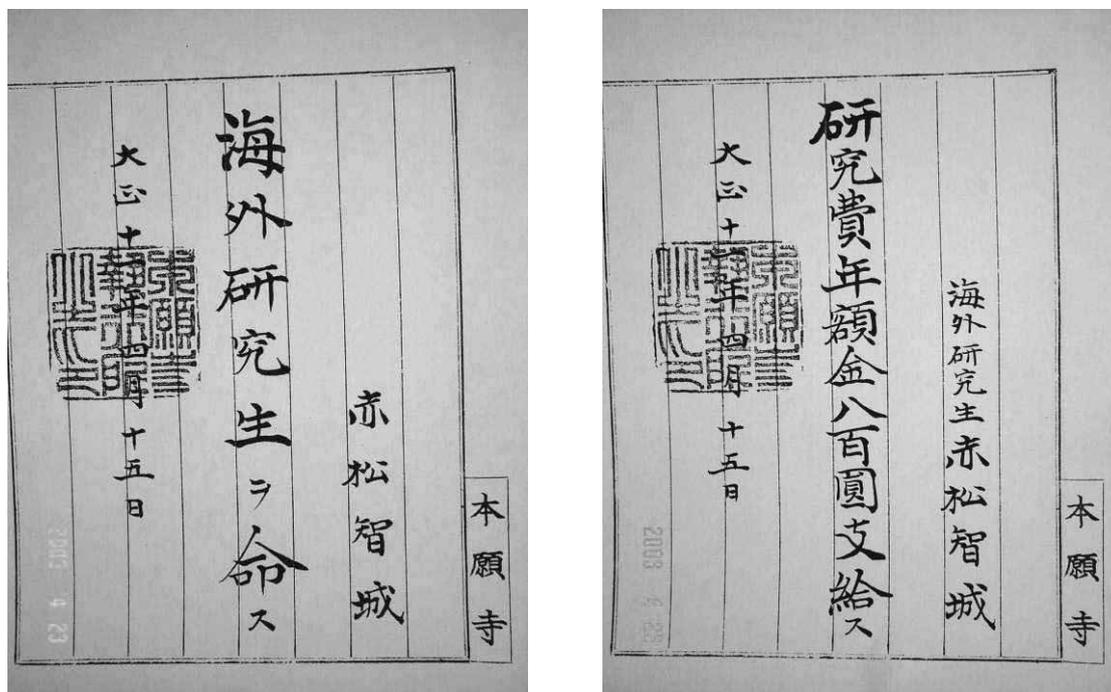
赤松が残した未完原稿：時計まわりに“猶太教史”、“西方亜細亜の宗教（鉛筆で「西方」を「西南」に書き改めている）”、“古代埃及の宗教”、“回教概説”（徳応寺所蔵）

## 1 イスラム教

赤松がヨーロッパ留学の間にイスラム教に対して集中的な授業を受けたという点は特記するに値する。その内容の一端を紹介してみよう。

赤松はヨーロッパ留学中フランスからドイツに渡った。これはイスラム学 (Islamkunde) を修学するためであったが、本願寺が赤松を“海外研究生”として選抜する形式で奨学金を800円支給したことが分かる。本願寺の証書発行日時が1922年4月15日で、赤松は5月15日からベルリンでイスラム学を修学する課程を踏んだ。その修学課程の具体的な内容は次のとおりである。時期は1922年5月15日から7月26日までであった。ベルリンにあるドイツイスラム学協会作業部会1922年夏のことだった。原文は、“Deutsche Gesellschaft Fur Islamkunde, Berlin,

Arbeitsgemeinschaft der Deutschen Gesellschaft für Islamkunde, Sommer 1922”である。



本願寺が発行した“海外研究生赤松智城”証書と研究費支給証書(1922年4月15日付)  
(徳応寺所蔵)

この修学課程は三部門で構成された。これを時期別に整理すれば次のとおりであり、この資料も徳応寺に保管されているものである。

Prof. Jabbar Kheiriが担当した**宗教と権力**(Religion und Fuhrerschaft)が5月15日から始めて月曜日ごとに7-9時間ずつ配分されて12週分がある。

1. Einleitung. Allg. Übersicht und die Schwierigkeiten der Islamforschung,
2. Wesen der Offenbarung und Erkenntnistheorie,
3. Mohammed als Vorbild,
4. Islam im Allgemeinen,
5. Islam und Recht,
6. Islam und Staat,
7. Islam und Politik: a. Verwaltung, b. Wirtschaft, c. Sozialpolitik,
8. Islam und Kultur: a. Seelische Kultur, b. Geistige Kultur,
9. Islam und Zivilisation-materielle usw.,

10. Islam und soziale Frage,
11. Islamisches Ideal,
12. Islamisches Programm und der Weg zum Ziel.

アラブ部門(Arabische Abteilung)は二つの小部門に分かれていた。

1. Prof. Dr. Kampffmeyer/Dr. iur. et rer. pol. Yehya Ah. el Dardiry,一日に4-5時間ずつ授業をして5月30日から6月6日まで。

2. Dr. Ahmed Waly、一日5-6時間ずつ授業、6月14、28、7月12日、26日(4回)。

トルコ部門(Turkische Abteilung)は次の三つの小部門に分かれた。

1.Landgerichtsrat Dr. Pritsch、a.トルコ民族主義、b. イスラム国家宗教問題とトルコ民族主義。5月17日、31日、6月14日、28日、7月12日、26日、一日6-7時間ずつ合計6回。

2. W. Bolland、トルコ歴史地理民族。5月26日、6月16日、30日、7月14日、28日、一日7-8時間ずつ、5回。

3. Suleiman Sirri, イスラム研究。5月23日、6月13日、27日、7月11日、一日7-8時間ずつ、4回。

赤松はイスラム学の学修後、1923年1月に現場である近東とコンスタンチノーブルに旅行をしながらイスラム教徒の聖戦とイスラムの復古と近代化に関心を持った(赤松智城1924.2.)。そして、1924年から1930年まで次々に回教思想(赤松智城1924.3/4.& 1928)、回教と人種問題(赤松智城1926.1.1a)、回教民族の動乱(赤松智城1926.1.1b & 1926.5.1)に関する論文を発表した。

ここで赤松が現代イスラム教の危機という内容で発表したことを調べてみよう。近代トルコの文化運動について、オリエント学者の Richard Hartmann の *Die Krisis des Islam*(1928)を主に紹介した議論として、近代化問題と国家的改革運動綱領としてのトルコ化問題で、近代化されたイスラム的トルコ主義を唱えたこと(赤松智城 1930.11.25:273)を紹介しつつ“de-moslemized moslem”(赤松智城 1930.11.25:277)という用語も提示した。

近代化が俗化(secularization)と区別されることを踏まえて(赤松智城 1930.11.25:280)、『内部伝道』の聖戦(赤松智城 1930.11.25:280)を通じてイスラム教の近代主義と改革運動を論じた。

赤松は京城帝国大学に異動してからはシャーマニズム研究に没頭し、イスラム教に関する関心を中断したが、京城帝国大学を辞任した後再びイスラム教に関する論文を作成し始めた。自身のシャーマニズムをはじめとする満州の宗教の研究を背景に“満州の回教”(赤松智城 1941.7.)に関する論文を発表したし、『回教の近代思想』を

主題に、以下のように述べた。“今や現實に到來した我大東亞の回教問題を考察する一助に供したいと思ふ”(赤松智城 1942.7.20: 1)。そして、その内容を以下のようにまとめた(赤松智城 1942.7.20: 1-2)。

回教に對する近代歐洲人の非難攻撃の重點を擧ぐれば次の如きものがある。

- 一、コーランは人間の意志の自由を否定する宿命論を説いてゐる。
- 二、回教の社會には尚ほ奴隸制度を保存してゐる。
- 三、回教徒は異教徒に對して所謂聖戰(Jihad)を主張して侵略を敢行する。
- 四、教祖モハメツトの言行に従ふて尚ほ一夫多妻を許してゐる。
- 五、神聖な行法である祈禱(禮拜)、布施(天課)、斷食(齋戒)、巡禮(朝覲)等の清規が餘りに煩瑣な外部的形式に流れて、近代の文化的生活には適應しない所がある。

「大東亞」という新しい政治的な状況下でイスラムとイスラムの近代思想の見方についても述べた。“我大東亞内の幾多の回教民族は、我國との接觸交渉に依つて、さきとは別の意味に於ての十字路に新たに逢着したやうであるが、茲にまた起つて來る一種の危機を適當に通過すべく彼等を指導する任務こそは、實は回教其者と併せて近代思想をもよく理解し且つ批判する我國の識者の當然負ふべき重要な使命ではなからうか”(赤松智城 1942.7.20: 12)。

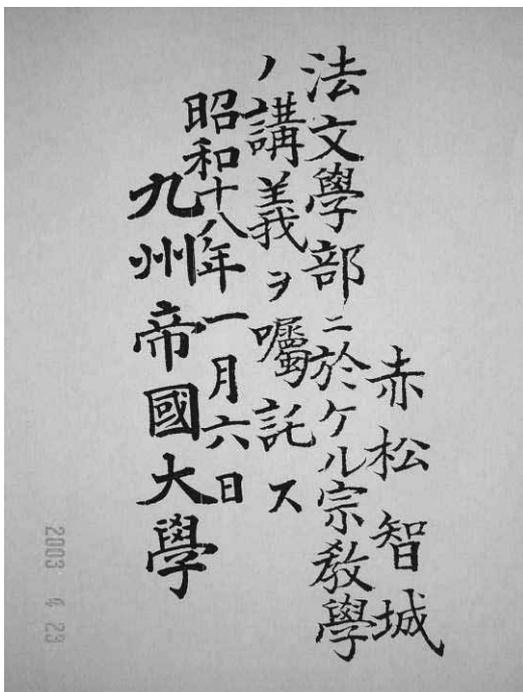
赤松はいくつかの大学でイスラムに関する講義をした経歴も見える。満州の建国大学では、1939年(康德六年八月)研究院後期学科考究班後期学科目編成(案)の一環として、文教学科の基礎科目に国民文化と世界文化を両軸とし、世界文化の中に「世界宗教文化」を含んだ。これに合わせて赤松の講義が開講された。赤松は、その講義のために教材を準備し、教材の表紙に「回教概説 赤松教官述」と印刷された小冊子を作った。内容はガリ版で製作した単行本として目次は最後のページに手書きで書いた。菊版サイズの104ページの長さで、表紙は活版印刷。目次の最後に「昭和十六年九月於建國大學講」と書いた。目次を書き出してみると、以下の通りである。

序説 西南アジアの民族と宗教(概述)、

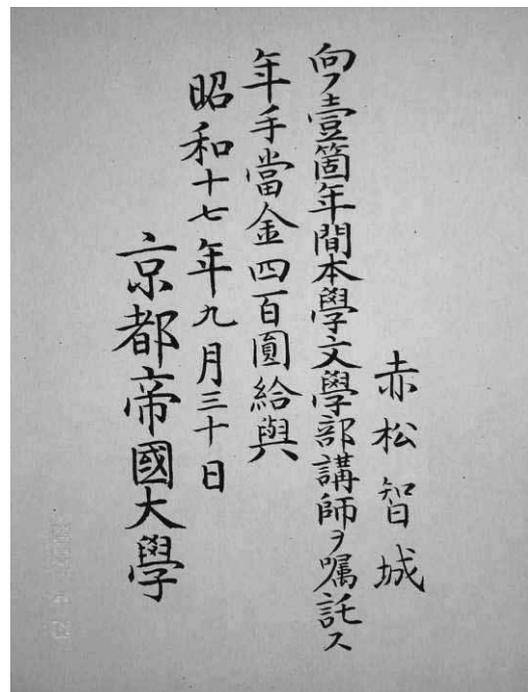
本論、

- 第一章 マホメツト小傳とコーラン解説、
- 第二章 回教の教法(信仰と行法)、
- 第三章 回教の發展、
- 第四章 回教の文化史的意義と特徴、
- 第五章 回教の近代的復興運動

本文中に、40～41 ページの間に表として“Al-asma at Husna”（尊名）表を添付している。全 99 個のリストとして八折二枚分である。登場する尊名のコーランの位置と領域名を併記することにより、学習効果を高めようと試みたものである。イスラム関連の赤松のこの講義は、後日九州帝国大学でも開催された。「赤松講師宗教学 回教概説 臨時講義日時割自一月八日（月）至全二十三日（土）六日間九州帝国大学法文学部」という文書が存在する。毎日 8 時 30 分から 10 時 30 分まで、または 10 時 30 分から 12 時 30 分までの午前 2 時間と 1 時 30 分から 3 時 30 分までの午後 2 時間の講義を 10 回開催する集中講義形式であった。この内容は、九州帝国大学時報 650 号（1943 年 1 月 25 日）には、次のような記録として残っている。「昭和十八年一月六日法文学部ニ於ケル宗教学ノ講義ヲ囑託スル赤松智城」、九州帝国大学時報 651 号（1943 年 2 月 10 日）には「昭和十八年一月二十三日囑託赤松智城法文学部ニ於ケル講義囑託ヲ解ク」として記録された。1943 年 8 月 1 日から 3 日の間に京都帝大楽友會館で第一回大東亞文化講座が実施され、赤松智城が「回教の由來と特色」を講演した（民族學研究新 1（11）：65、1943. 11. 発行。）



宗教学の名の下に赤松が九州帝国大学で行った「イスラム解説」の講義のための証明書



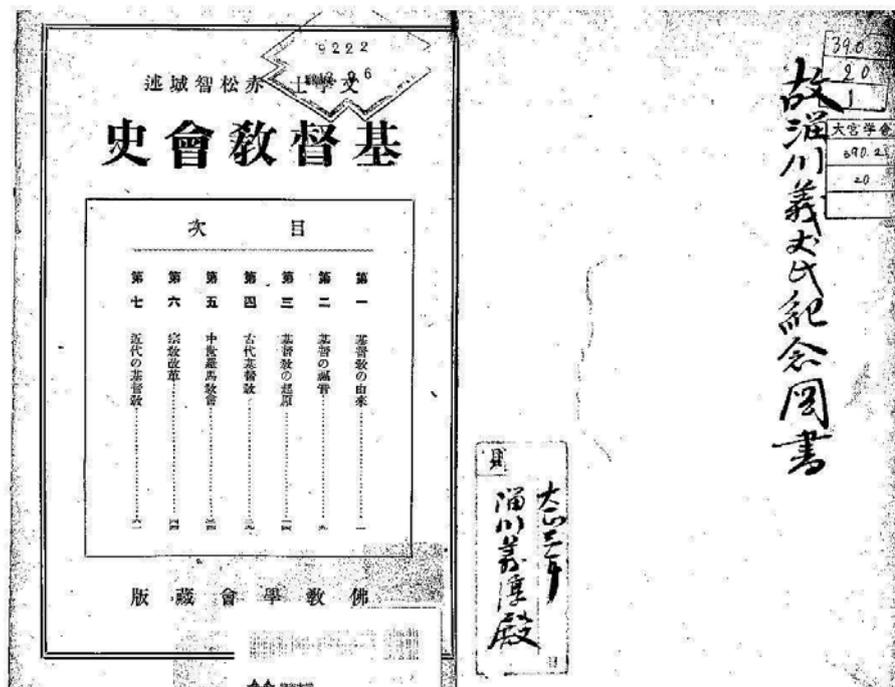
赤松の京都帝国大学文学部講師囑託書

## 2 ユダヤ教

赤松はユダヤ教に対しても少なくない関心を見せ、原稿を作成して残した。その内容を赤松が書いた原稿から引用すれば次のとおりだ。“猶太教史(前編)未完、目次、序説、第一章 漢民の宗教、第二章 農民の宗教、第三章 予言者の宗教、第四章 律法の宗教、第五章 メシアの宗教(欠)”。これは200字原稿用紙で213枚の分量であり、その中にパレスチナの地図(ドイツ製1921年製作)2枚が含まれている。

## 3 キリスト教

赤松はキリスト教に関する文章を残したが、それは極めて疎略だ。その中で一つの単行本形式によって製作されたのが<基督教会史>(仏教学会蔵版)という題名の69ページの書籍だ。発行年度が記載されていないことから通常の出版過程を経ないで作られたものだということがわかる。発行年度を推定できる一つの根拠は寄贈された年度と思われる“大正三年涌川義淳殿”という筆跡だ。1914年に寄贈されたことが分かるが、この書物の出版年度が1914年である可能性を提示できるだけだ。本文のうちには出版年度を推定できる根拠を発見できなかった。



赤松の著述である<基督教会史>  
(龍谷大学図書館蔵、龍谷大学の朴炫国教授の案内で奉読した)

目次によれば、その構成は以下の通りである。

- 第一 基督教の由来、
- 第二 基督の福音、
- 第三 基督教の起原、
- 第四 古代基督教、
- 第五 中世羅馬教会、
- 第六 宗教改革、
- 第七 近代の基督教

末尾に1ページを追加して“救世軍(Salvation army)”の社会事業的性格と活動について簡略に付言してあった。

これは、後日徳応寺を中心にして展開した社会事業の姿を連想することになる大きな課題だ。

本文内容中にはキリスト教と関連した日本の場合を簡単に言及した部分もある(pp.63-64)。

キリスト教に関する赤松の文がとても少ないことに関して一つ議論したい部分がある。赤松はこの書物でキリスト教の反国家的性格に対して言及した すなわち“帝王崇拜、所謂Emperor worship”または“皇帝崇拜”にさからうキリスト教に対する紹介とキリスト教迫害史を紹介しているが(p. 23)、中世に達して展開した宗教改革に関連した現象を“真俗両権”の闘争として描写した(p. 37)。当時この文を読む帝国日本の読者らが連想できる問題が提起され得たと考えられる。日本の天皇制に対してあえて言及することはできなかった当時の状況と赤松の文を照らし合わせてみれば、赤松がキリスト教に関する文章の発表を極めて自制したのではないかと考えられるのである。

#### 4 古代宗教

徳応寺には赤松の遺品が保管されている。その中で発見できる原稿形態の遺品の中にいわゆる古代宗教に関する記録等を見ることができる。例えば、“大正十三年―十四年講”に書かれた“古代埃及の宗教”という文書は下のような具体的な目次となっている。

序説、

第一章 神話及び神学

総論、

- 第一節 動物神、
- 第二節 植物神、
- 第三節 人間神、
- 第四節 自然神、
- 第五節 抽象神、
- 第六節 オシリス系統の神々、
- 第二章 新帝国の宗教、殊にAch-en-Atonの宗教改革、
- 第三章 僧制並びに寺院経済、
- 第四章 神殿、墳墓及び祭儀、
  - 第一節 神殿と墳墓、
  - 第二節 祭儀、
- 第五章 埃及宗教の神聖観念と靈魂観念、
- 第六章 古代埃及に於けるTotemismの問題、
- 第七章 後期の埃及宗教

原稿状態である西南アジアの宗教に関する内容を目次を中心に紹介する。

“1925.4.-1926.3.講 西南亜細亜の宗教”

目次(第一巻)、

- 序説 西南亜細亜の国土、民族及び文化、
- 第一編 バビロニア。アツシリアの宗教、
  - 序言、
  - 第一章 古代バビロニア宗教の由来——スメールの宗教、
  - 第二章 呪法的宗教、
  - 第三章 諸神

これは、200字原稿用紙で282枚の分量であり、末尾に“未完”と書かれている。そして下のようなメモが添付されている。このメモは“京城帝国大学法文学部”原稿用紙に“昭和十年”と鉛筆で書かれ、引き続き添付された題名は“西方亜細亜の宗教”であり、このための目次は以下の通り。

- 序論 西方アジアの地域、民族及文化、
- 本論、
  - 第一章 原始宗教概説、
  - 第二章

- 第一部 諸神の発生と宇宙の創造、
- 第二部 太古の浄土、
- 第三部 人類の創生、
- 第四部 洪水の伝説、
- 第三章 猶太教史、
- 第四章 回教要義

## 5 結語

仏教寺院に生まれ育った赤松が、仏教を研究の対象として客体化することによって、宗教学を展開することができたことに注目したいと思う。彼が京城帝国大学の宗教学教授職を辞任して住職の職分に戻ったことは、これ以上仏教を研究対象すなわちオブジェクトと見なさなくなったということで、これがそのまま教授職辞任の理由だったと理解することができる。人類学的方法で宗教学を研究した赤松は、仏教以外にも世界的な次元でいろいろの宗教に対して多様な関心を表明した。特に彼がイスラム教に対して見せた関心は今後新たに評価されなければならない部分があると考えられる。

赤松が残した研究資料が未刊原稿の状態が存在することに対して注目し、帝国日本の宗教学という枠組みで再考してみる価値がある。また、彼が残した写真資料に対して深みのある分析をするのも価値ある研究作業だ。前稿から引き続く本稿はそういう問題意識による一連の試みの一端に過ぎない。このような試みは、赤松智城という宗教学者が学界で決して忘れられてはいけないのだという信念に基づいており、彼の宗教学は十分に継承する価値があると信じている。帝国日本の宗教学者中で赤松智城ぐらい広範囲に多様な宗教現象に対して関心を持って研究業績を残した者はない。梵文から出て宗教学で学問の境地を広げ、再び梵文の僧侶に戻った赤松が残した文字を紹介することで本稿を締めくくろうと思う。この文は1933年に新年をむかえて残したものだ。

<p>当相敬愛無相憎嫉 有無相通無將貪惜 言色常和莫相違戻 うに</p>	<p>互いに敬愛して憎みあったり嫉妬したりせず ある人もない人も互いに通じ合い、むさぼったり惜しんだりせず 言葉と表情をいつも温和にして背を向けることのないように</p>
--	---

昭和八年初春 智城拝書

[参考文献]

- 赤松智城 1924.2. “回教徒の復興精神”龍谷大學論叢 254: 45-57.
- 1924.3/4. “回教思想の特色”, 哲學研究 9(3), 9(4).
- 1926.1.1a “回教と人種問題”, 中外日報 7892號. pp. 1-3.
- 1926.1.1b “近東に於ける回教民族の動亂に就いて(上)”, 宗教研究(新) 3(1): 45-58.
- 1926.5.1 “近東に於ける回教民族の動亂に就いて(下)”, 宗教研究(新) 3(3): 124-133.
1928. “回教思想”, 世界思潮(岩波講座). 東京: 岩波書店. pp. 381-393.
- 1929.3.13 輓近宗教學說の研究. 東京: 同文館.
- 1930.11.25 “現代回教の危機”, 現代宗教批判(宗教研究臨時特輯號), 宗教研究會編輯部編.東京: 同文館. pp. 268-280.
- 1932.12. 宗教史方法論(現代史學大系 第五卷). 東京: 共立社.
- 1941.7. “滿洲の回教に就いて”, 宗教研究 季刊3年(2): 34-45.
- 1942.7.20 “回教の近代思想”, 姉崎博士古稀記念論文集(季刊宗教研究第四年第二,三輯). 東京: 日本宗教學會. pp. 1-12.
- 高野山大学百年史編纂室 1986.10.15 高野山大学百年史.
- 全 京秀 2005.10.15 “赤松智城の学問世界に関する一考察: 京城帝国大時代を中心に”, 韓国・朝鮮の文化と社会 4: 156-192.
- 2008.1.30 “‘宗教人類学’と‘宗教民族学’の成立過程: 赤松智城の学史的意義についての比較検討”, 季刊日本思想史 72: 107-129.
- 2017.3.31. “赤松智城の宗教学散策: 未刊原稿と写真資料から見る”やまぐち地域社会学研究 14: 1-12
- 菊地 暁 2007. 2. “赤松智城論ノオト——徳応寺所藏資料を中心に”, 人文學報 94: 1-35.
- 徳応寺 1992.2.29 寺史. 徳山: 徳應寺.
- 中生勝美 2016.3.20 近代日本の人類学史. 東京: 風響社.
- 岩波書店編 1925.2.1 岩波哲學辭典(増訂版). 東京: 岩波書店.
- 本願寺新報 1024号(1944.9.25)

民族學研究 新 1(11): 65. 1943. 11.

(日本語訳：安溪遊地、安溪貴子)

所属：貴州大学

E-mailアドレス：korancks@hotmail.com